

第1章 今、なぜ小中一貫教育なのか

これまで、学校における児童生徒の学習指導上、生徒指導上の様々な課題については、教職員をはじめとした関係者の努力によって、市町村教育委員会の指導の下、各学校単位で解決を図るとともに、異校種をはじめ複数の学校段階間で連携し、課題解決に当たる取組が行われてきました。

現在、少子化、情報化、グローバル化の進展など、児童生徒を取り巻く社会の状況が様々に変化する中、児童生徒に関する課題が多様化、複雑化しています。学校においては、校種間の枠を超え、複数の学校段階間で連携して課題解決に当たることがより一層求められています。

I 小・中学校間の接続期における背景と課題

1 小中一貫教育が求められている背景

(1) 小・中学校での指導の違い

小中一貫教育が求められている背景としては、小学校から中学校に進学する際の接続が円滑なものになっていないことが考えられます。その一つの原因として、小・中学校間の接続期における学習指導、生徒指導の違いが考えられます。

中央教育審議会初等中等教育分科会 学校段階間の連携・接続等に関する作業部会の「小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理」(平成24年7月)では次のように指摘しています。

《学習指導面》

① 授業形態の違い

小学校では学級担任制であるのに対し、中学校では教科担任制

② 学習指導上の課題の共有

各児童生徒の小学校時点における学習指導上の課題が中学校と十分共有されていない

《生徒指導面》

③ 生徒指導上の課題の共有

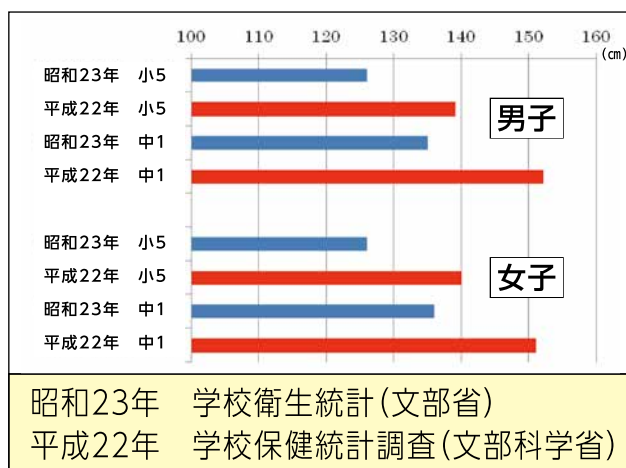
各児童生徒の小学校時点における生徒指導上の課題が中学校と十分共有されていない

④ 生徒指導の方法の違い

中学校では小学校と比較して生徒に課せられる規則が多く、中学校においては、小学校よりも規則に基づいたより厳しい生徒指導がなされる傾向

(2) 児童生徒の身体的発達の早まり

児童生徒の発達については、6-3制が導入された昭和20年代前半と比較すると、例えば、平成22年のある学年の児童生徒の平均身長（右図は小5と中1の比較）は、昭和23年当時の2、3年上級学年の児童生徒の身長に相当するなど、身体的発達が2、3年早まっている傾向が見られます。

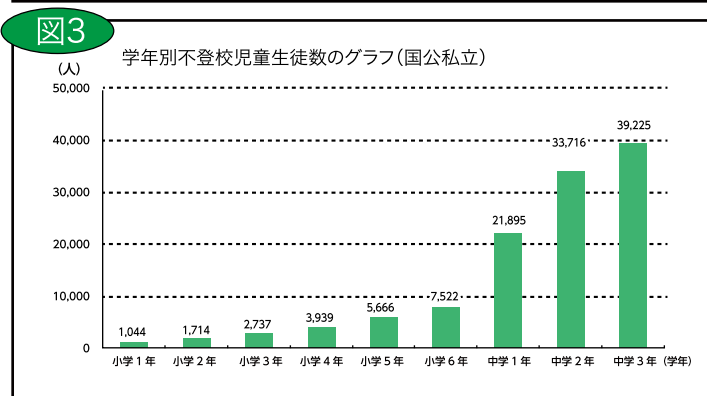
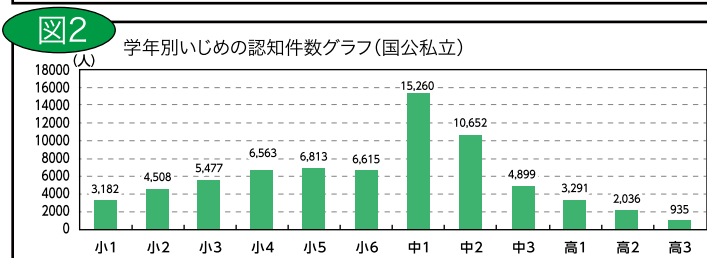
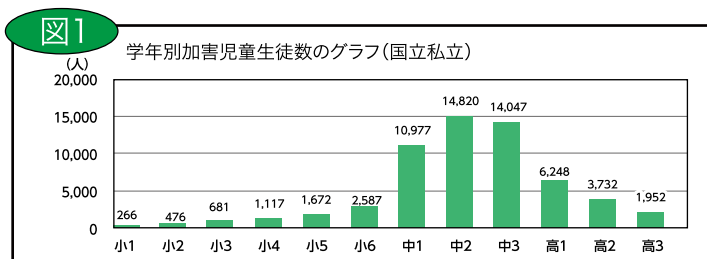


2 全国的に見られる課題

児童が小学校から中学校へ進学する際に、新しい環境での学習や生活に移行する段階で、いじめや不登校等が増加するいわゆる中1ギャップが指摘されることがあります。

文部科学省の調査では「学習上の悩み」として「上手な勉強の仕方がわからない」と回答する児童生徒数や「暴力行為の加害児童生徒数」(図1)、「いじめの認知件数」(図2)、「不登校児童生徒数」(図3)が中学校1年生で大幅に増える実態が明らかになっています。

また、各種の調査によると、「授業の理解度」「教科や活動の時間の好き嫌い」について、中学生になると肯定的な回答をする生徒の割合が下がる傾向にあります。



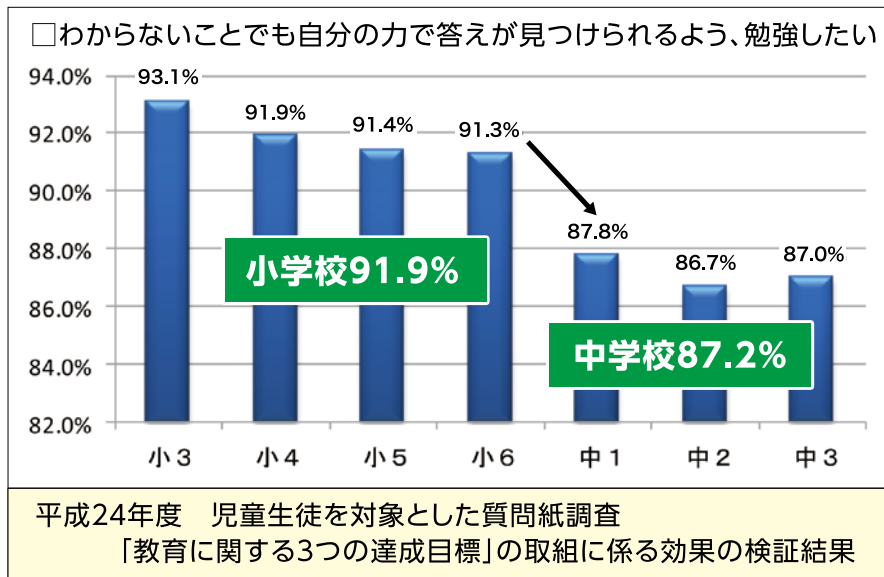
平成23年度児童生徒の問題行動等生徒と指導上の諸問題に関する調査(文部科学省)

3 埼玉県に見られる課題

埼玉県においても、全国的な状況と同様に、中学校進学に伴う学習環境の変化や人間関係の多様化により、生徒がとまどいや不安を感じ学校生活に適応できないケースが見られます。

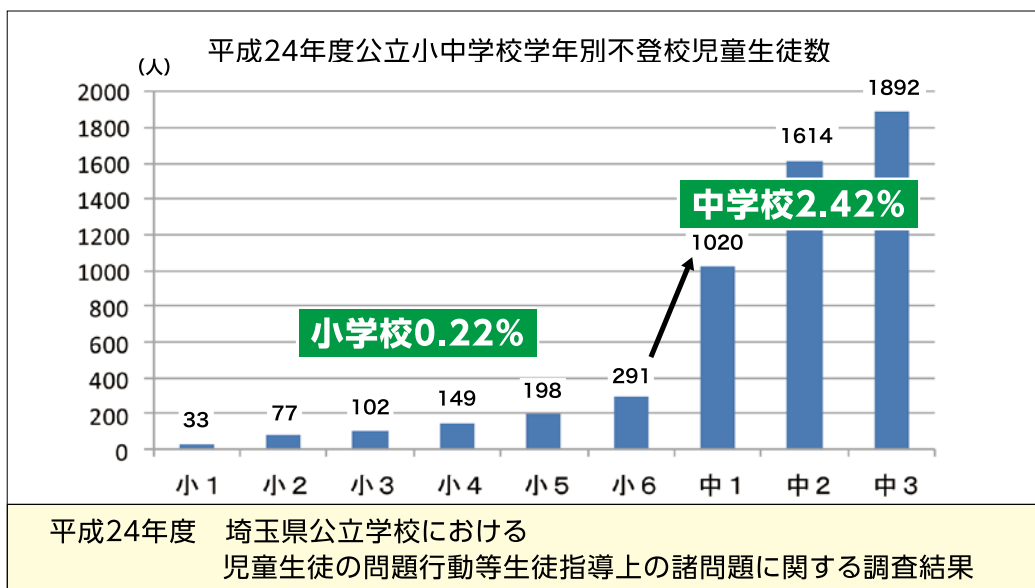
(1) 学習意欲の低下

小学校時代は高かった学習意欲が中学校進学後に低下する傾向があります。小学校段階から中学校での学習を見据えた教育を進めることで、学習への関心や意欲を低下させることなく子供たちの学びを継続することが求められています。



(2) いわゆる「中1ギャップ」

小学校から中学校に進学する段階において、不登校の児童生徒の割合が増加傾向にあります。増加の理由として、中学校進学後は、学級や部活動における人間関係等の変化が大きく、子供たちの心理的不安が高まるためと考えられます。小学校段階から中学校の様子を知り、中学校進学への不安を減らす等の改善が求められています。

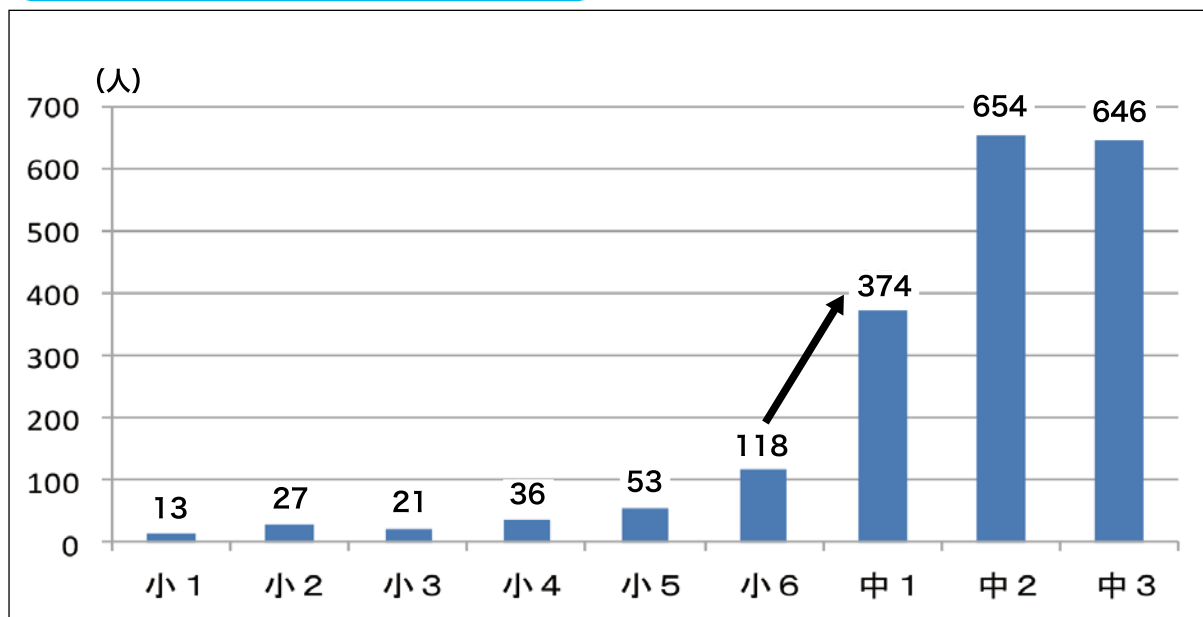


埼玉県では、学習意欲の向上やいわゆる「中1ギャップ」の解消に向け、小・中学校9年間を一貫した教育(以下「小中一貫教育」とする)の推進に取り組んでいます。

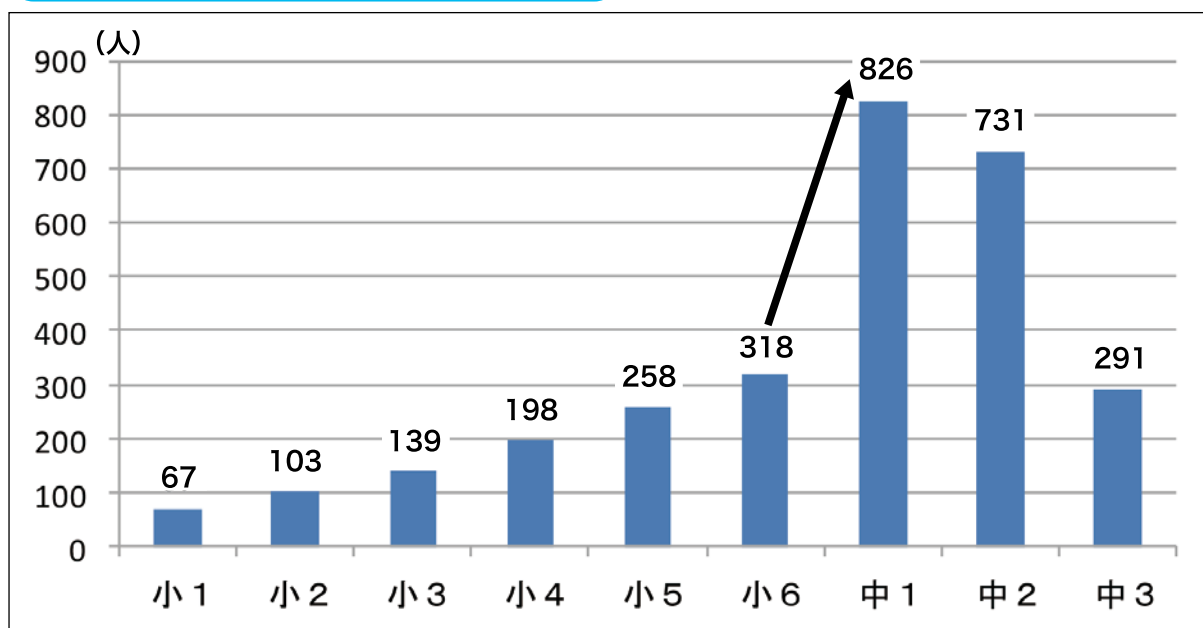
平成24年度

埼玉県公立学校における児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査結果

○平成24年度学年別加害児童生徒数



○平成24年度学年別のいじめ認知件数



Ⅱ 小中一貫教育とは

1 「小中連携」から「小中一貫教育」へ

埼玉県内には、小中連携を図る取組を行っている小学校数が 680 / 709 校 (95.9%)、中学校数が 341 / 363 校 (93.9%) あります (平成25年度義務教育指導課調べ)。

ここで、「小中連携」と「小中一貫教育」の違いを明らかにしておきましょう。

中央教育審議会初等中等教育分科会 学校段階間の連携・接続等に関する作業部会では、「小中連携」と「小中一貫教育」について次のように整理しています。

○「小中連携」

小・中学校が互いに情報交換、交流することを通じ、
小学校教育から中学校教育への円滑な接続を目指す様々な教育

○「小中一貫教育」

小中連携のうち、小・中学校が9年間を通じた
教育課程を編成し、それに基づき行う系統的な教育

【小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理（平成24年7月13日）】

小中連携、小中一貫教育については、制度的に位置付けられたものはありません。全国の学校、市区町村において、小学校における教育と中学校における教育を円滑に接続させるために、「4-3-2制」をはじめ、独自の取組が進められています。教育課程の基準の特例を活用して推進される小中一貫教育がある一方で、そうした教育課程の基準の特例を活用せず、また、教育課程以外の点においても現行制度の範囲内で、各市区町村の創意工夫により取り組まれている小中連携、小中一貫教育も多数存在しています。

2 埼玉県が考える小中一貫教育のねらい

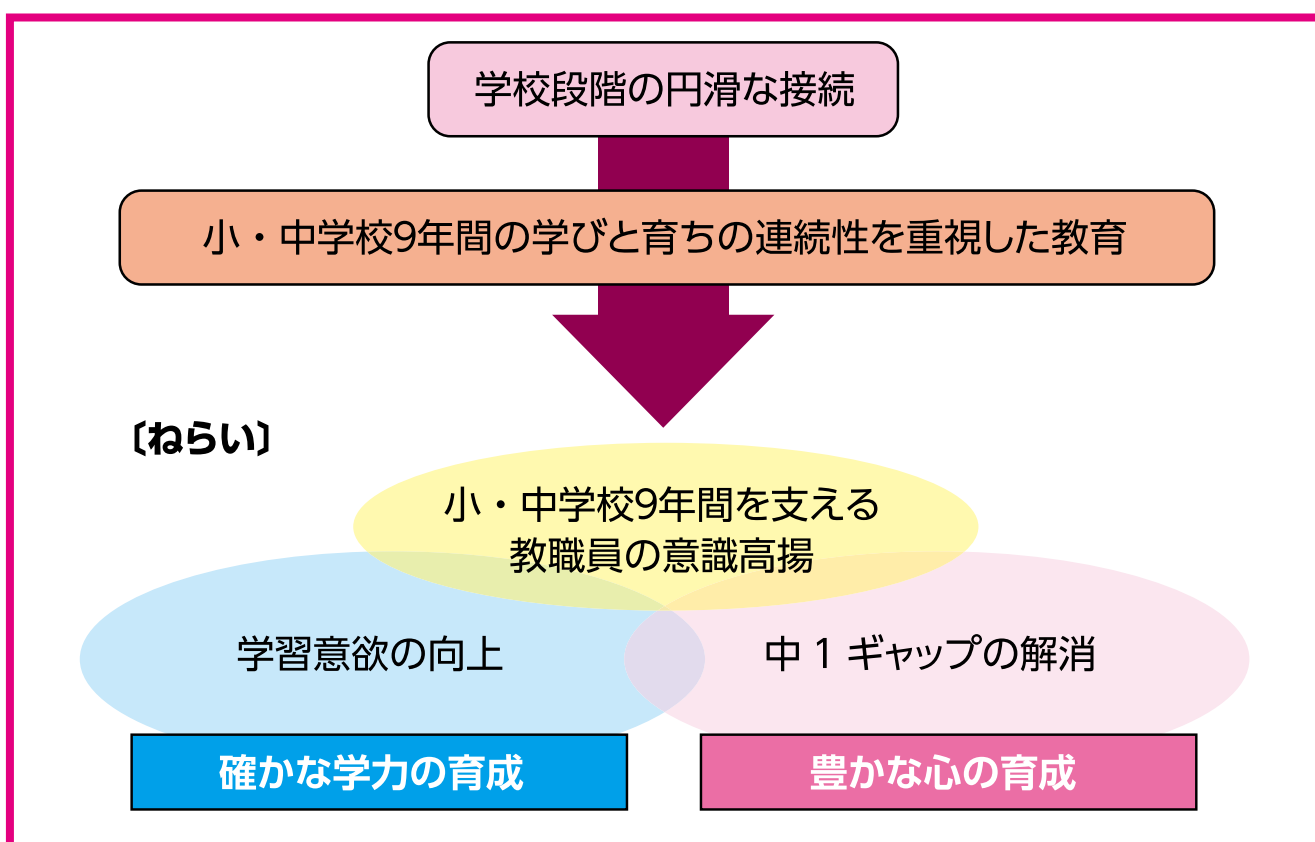
中央教育審議会初等中等教育分科会 学校段階の連携・接続等に関する作業部会が整理した「小中連携」「小中一貫教育」の推進を図るためには、中学校区内で「目指す児童生徒像」や「重点目標」を設定、共有することがとても重要です。

その実現を図るため、市町村教育委員会の指導の下、小・中学校の教員が、中学校区の授業改善の視点を踏まえた全体計画や系統表、年間指導計画等の教育計画(9年間を見通したカリキュラム)を編成していくことによって、学習指導や生活指導の改善が期待できると考えています。

○埼玉県が考える小中一貫教育

中学校区内の小・中学校が「目指す児童生徒像」や「重点目標」を設定、共有し、その実現を図るため、9年間を見通したカリキュラムを編成して、それに基づき行う系統的な教育

小中一貫教育のねらいは、小・中学校9年間の学び(学習面)と育ち(生活面)の連続性を重視することによる、児童生徒の学習意欲の向上と、いわゆる「中1ギャップ」の解消です。そのためには、教職員が子供たちの成長を9年間にわたり支える意識を高めることがとても重要になってきます。また、中学校区の目指す児童生徒像や重点目標を設定、共有し取り組むことによって、確かな学力と豊かな心の育成での効果が期待できます。



小中一貫教育推進モデル地区の調査では、概括的に小中一貫教育に取り組むことによって様々な解決に役立つ例が見られています。

〈参考1〉小中一貫教育に関する調査（意識調査）結果

中学校1年生対象

中学校入学前の不安が、大幅に減少!



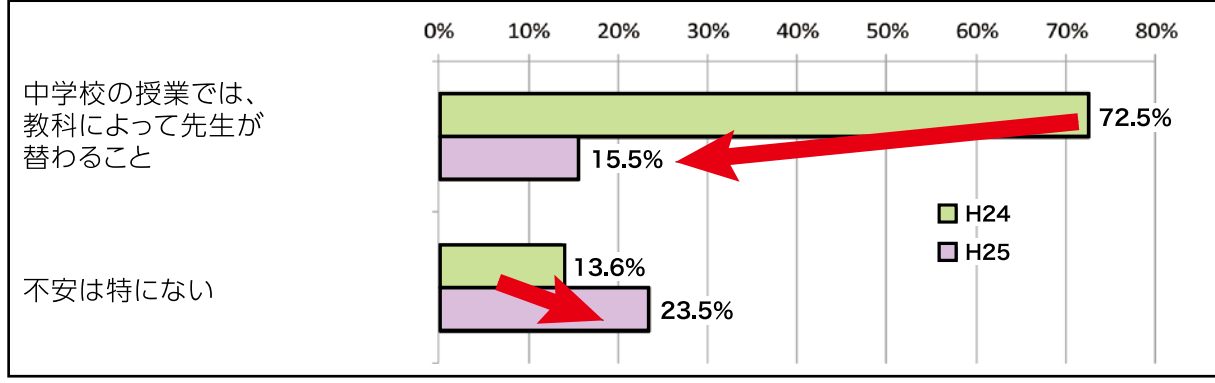
□ 調査時期、対象

平成24年9月 モデル地区の中学校1年生 557名

平成25年5月 モデル地区の中学校1年生 548名

※モデル事業開始直後の中学校1年生と、事業開始1年後の中学校1年生の比較

1 中学校に入学する前に、不安に感じたこと。



- ・教科ごとに教師が替わることを不安に感じる生徒が大幅に減少
- ・中学校入学に当たって特に不安を感じなかった生徒が増加



2 中学校入学前の不安を軽くするのに、小学生の時に体験しておくとういと思うもの。



部活動を体験したことで、先輩と交流することもできたし、内容も分かってよかった。

中学校の英語と理科の先生が来てくれて、授業は面白いと思った。

生徒の声

小学生の時に体験したことで印象に残っていること

中学生との交流体験から「中学校は楽しいところ」という思いが強くなった。

挨拶運動で先輩から中学校の話聞いたこと。

中学校の先生は厳しいと思ったけど、小学校に来て授業をしてくれてやさしかったから安心した。



教員対象

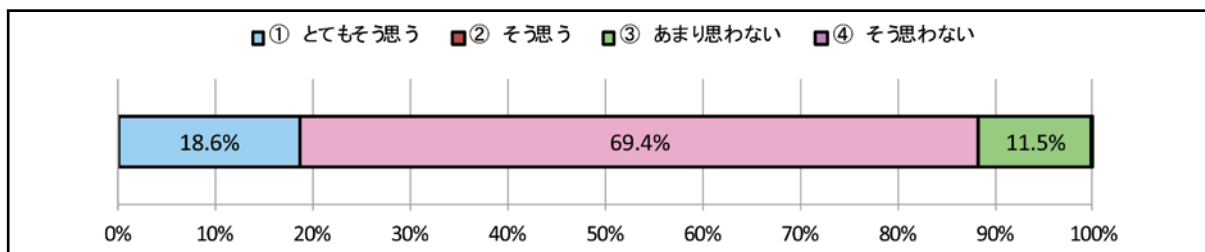
小中一貫教育の取組は、「学力向上」、
「生徒指導」の課題解決に効果的!



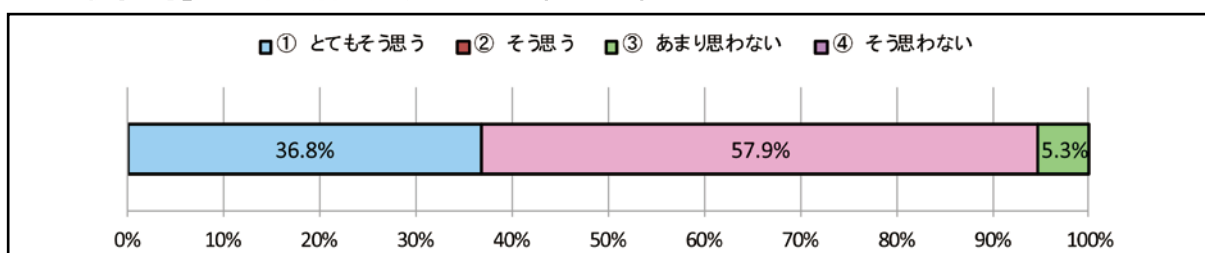
□ 調査時期、対象

平成25年8月 モデル地区の小・中学校教員 468名

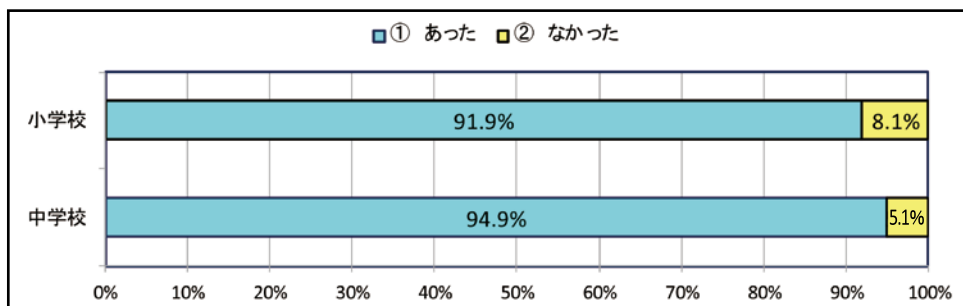
1 「学力向上」の課題解決に効果的（とても）そう思う。88.0%



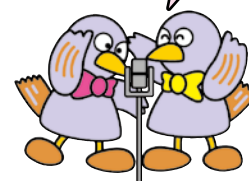
2 「生徒指導」の課題解決に効果的（とても）そう思う。94.7%



3 異校種の授業参観や異校種教員とのチームティーチングの実施で参考になったことがある。小学校教員 91.9% 中学校教員 94.9%



「参考になった」
90%超



4 異校種の授業を参考にし、自分の指導方法の改善につなげたいこと。

